

野鳥たより

—北海道—

第 11 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和47年8月
5月・8月・11月・2月 年4回発行

イソシギは北海道には夏鳥として四月中に渡来し、海岸から低山帯の小さな流れのほとりまで、各地にふつうにみられる。水面すれすれに、翼を水平より下に保って小さきみに羽ばたきながら飛んでいるのをよくみかける。飛んでいるときには翼の白い線がはっきりとわかり、また、とまっているときには尾をいつも上下に振っていること、腹面の白色が翼の前で背面の褐色にいくこむように入りこんでいるのが、見わけるときのポイントになる。ほとんど地上にいるが、ときにはこの写真のように低い木や杭などにとまることもある。

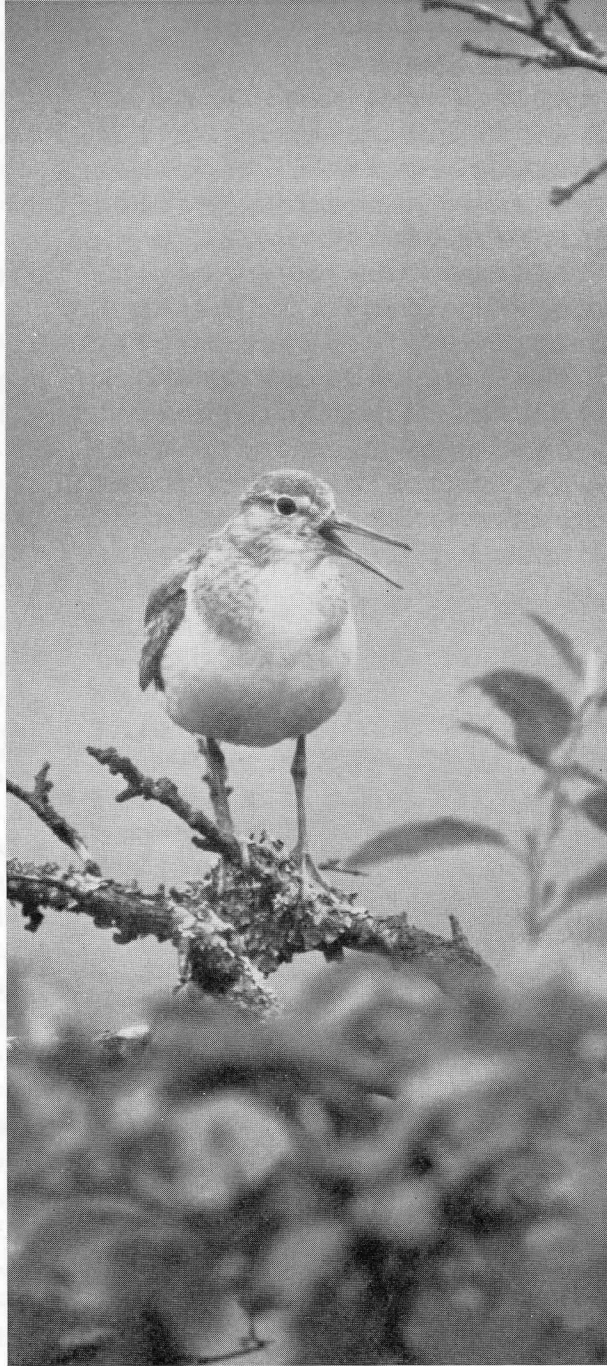
繁殖期は早く、五月にはさかんに鳴きながら巣のまわりを飛んでいるのがみられる。そして、七月にはもう移動をはじめらしい。石狩平野

イソシギ

では、七、八月にかけて夜空をわたってゆくイソシギの声を毎晩のようにきくことができる。ツィーリーリという涼しげな声が星の中から落ちてくると、乾燥した団地の空気に一抹のうるおいが加わり、勤め帰りの疲れた心にとやすらぎが訪れるのを覚える。

ところで、尾岱沼などでは、冬に岩礁地帯でイソシギをみたという報告が二、三ある。イソシギの渡去が早いことを考えると、厳冬の道東にのこっているのが北海道で夏を越したイソシギであるとは、ちょっと信じにく

い。それで、これは北アメリカで繁殖する別種のイソシギ (Spotted Sandpiper) ではないかと疑っている人もあるようだ。北海道の鳥にはまだわかっていないことが多いのである。



写真は濤沸湖畔で 撮影 柳沢紀夫



自然保護を考える

◆ 森林と湿原の保護を

北海道の自然の中で貴重なものといえば、森林と湿原であろう。森林の自然における効用は、いうまでもなく土地の荒廃を食い止め、天然の治山、治水の役目を果たしている。また、人間の生命の根源ともいべき空気中の酸素は、多く森林によって造り出される。

よく繁った森林では、1ヘクタールから年間10～16トンの酸素が放出されるというし、また、大気のを浄化する働きも大きい。1ヘクタールの森林が浄化する大気中の塵埃は、30トン以上の能力を有するという。この働きがなければ、人間は酸素欠乏に追いこまれるばかりか、大気汚染は進みっぱなしとなる。しかしこの働きも、汚染度と森林の容量との比率が大切で、汚染が過剰となれば自浄作用は失われ、森林は枯死する。

また湿原についていえば、日本で原始的な湿原が保存されている地域といえば、もう本道しかない。6月5日、スウェーデンのストックホルムで開かれた国連人間環境会議に、世界の湿原を保護するための条約（ウエットランド条約）締結のための話し合いがもたれたが、日本が用意している条約のための候補地3カ所のうち、尾瀬と並んで、本道からは、釧路湿原と、サロベツ原野があげられている。湿原はそれ自体が文化財といえる。湿原には太古からの歴史が秘められており、それだけに、多様な植物群や、動物の生存を可能にしており、土地の歴史を解くための手がかりでもある。

ところが、森林は産業開発や、国土開発の波を受け、酸素造成の担い手としての機能すら失なうまでに乱伐が進んでいる。一方の湿原は、安あがりな工業基地としてどんどん埋め立てが進んで、湿原が育てた貴重な植物群も、野生動物も滅亡の一步手前に立たされている。

自然保護はもう対岸の火事ではない。

◆ 増毛町を訪ねて

お盆の中日、母の3年忌をかね増毛町へ墓参した。喧騒の札幌をのがれて、仕事のわずらわしさもなく、草深い里を訪ねる気分はまた格別である。

降り立った駅頭には人影もまばらで、白い舗道にはさんさんと陽光が降り注いでいた。大気汚染を感じることもなく、潮の香の立ちこめる街並みは素朴である。まちなかの寺の本堂で、坊さんが読経する間も、みんみん

としみ入るような蟬の声があった。

「発展性がないからさ」

と、在住の友人は吐き出すように呟く。しかし、その発展性のなさに羨望を感じるのはどうしたことだろう。

畠中町から暑寒沢への墓参の道も、信号機にわずらわされることもない。袋小路の増毛町では、町外から無用の車輛が入ることもなく、静かなたたずまいである。

増毛町はかつて鯉の干石場所として栄えた。幼少の記憶でも、4丁目通りは紅燈の巷として、あでやかなさんざめきがあった。いまは過疎の中に沈んでその面影もない。人間が呼吸するところは、こんな汚染のない緑の空間でなければならないと思う。

しかし、人は都市を求めて集中し、過密は過密を生んでいる。過疎は過疎をよぶ。都市の中には文明と称されるもの、すなわち高い所得と、便利な暮らしが求められるからである。人間のその願望を阻止することは困難である。環境保全と云い、自然保護と云い骨の折れる仕事である。

◆ ショウドウツバメ

7月18日の道新に、猿払の国道工事で、ショウドウツバメの巣が崖ごと破壊されている記事が掲載された。そのときに繁殖期の彼等にとって、ヒナも卵もすべて押し潰されたことは想像に難くない。

彼等は、はるばる南支那、フィリピン方面から夏鳥として渡来する。砂層の断崖に深さ1mに近いほら穴を掘って営巣する習性のあるところから、ショウドウツバメ（小洞燕）の語源が生まれたものであろう。

彼等は集団で営巣し、直径5～9cmほどの穴の奥に、椀形の巣を作り、産座には動物の毛や羽毛、枯草などを集めて3～5個の産卵をする。日本では、いま本道以外に渡来地はなく、しかも営巣地が限られているため、河川の改修や、堤防工事はこの鳥にとって致命傷である。

ショウドウツバメの巣を踏み潰した建設業者には、なんの悪意もなかったであろうし、法律上の違反も構成しない。しかし、いま一步、野鳥に対する認識を有していたならば、この惨事は防げたであろうと悔まれてならない。自然保護思想が広く定着する日はいつのことか。そのときに、我等の廻りに保護すべき自然が残っているのだろうか。

鳥のノート (1)

土屋文男



①

◆ 鳥の図鑑のこと

この「野鳥だより」の第9号に、図鑑の紹介記事があった。写真(1)は Bruun、Singer 共著のドイツ版である。昨夏、ハンブルグの書店で買ったもの。

R. Peterson 著 A Field Guide to the Birds of Britain and Europe に英、仏、独語版があるように、The Hamlyn Guide to Birds of Britain and Europe にも各国語版があって便利である。

この表紙の鳥はゴシキヒワで、ドイツでは「スティグリィッ」英語国では「ゴールド・フィンチ」と呼ばれる、アトリ科の美しい鳥である。昔、欧米の飼鳥家が、実は好んで飼った鳥である。金籠も、わざわざ、ゴールド・フィンチ用として市販していた。ヨーロッパの人たちは、自国産の小鳥を籠に飼わないが、全々、飼わないというのはウソである。この鳥の雄を雌のカナリヤにかけて種間雑種 (F1) を作ったことが、よく記事になっている。

この仲間では有名なのはウソ (ブル・フィンチ) で、図

鑑の表紙絵になっていることが多い。

これらの図鑑は、中味のコトバが英、独、仏になっているだけで、ページ数は全く同様、表紙の絵だけが違っているのと、紙質が異なっていて、ドイツ版は薄手である。印刷は何れもイタリヤ。

少々オーバーな言い方だが、ヨーロッパでは聖書の次に売れるのが、動植物のハンディな図鑑だという。パリのオルリー空港や、ロンドンのヒースロー空港で、こうしたものを売っているのも、住民の関心度の高さを示している。

◆ 鳥の餌台のこと

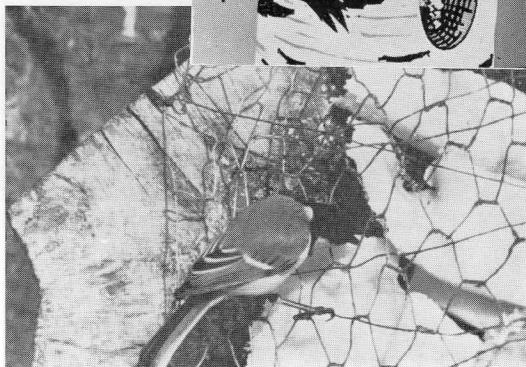
イギリスの Tony Soper 著「バード・テーブル」という本にてくる、キツキの餌台である。(写真2)

別に、これまでにしなくともよいのだが、庭に風致をそえるにはオモシロイと思う。出典が明らかにされていないが、日本鳥類保護連盟刊行の「野生鳥類の保護」(昭和46年10月)の図版は、この本によったものがある。

豚脂に金アミをかけただけのものが、鳥たちには豪勢など馳走で、実用的である。(写真3)しかし、愛鳥家の多いイギリス人の発想なのでここに紹介した。

③

②



濤沸湖のハクガン

玉 田 誠

濤沸湖流路口を閉していた漂砂が除去されたのは3月10日で昨年より3週間もおそく、国道にかかる濤沸橋の上手100mほどのところまで開水面が生じたのは3月12日の昼過ぎでした。そして、この日の夕方16時20分ごろ待望の白鳥が宮津氏宅裏手付近に着水しました。

着水を目撃した中学2年の高橋葉子君の話では、その中の白色のもの5羽と灰色のもの3羽は飛来後間もなく此方の岸に近寄り、すぐ餌についたようで、いままででないことでした。私が確認したのは17時10分ごろで、白色のもの16羽、灰色のもの8羽でした。

翌13日の7時40分、昨夕は向岸にいたのではっきりしなかった小形の白鳥が白鳥でないことがわかりました。登校後その特徴（首の長さ、嘴の色、黒色の初列風切等）からハクガンらしいことはつきとめました。ただ1羽だけ白鳥に混じっているのも妙なので、大西重利鳥獣保護員に連絡したところ、ハクガンであることが確認されました。以下このハクガンについて、生徒たちと観察して気付いたことを記してみます。

1 成鳥5、幼鳥3のオオハクチョウのグループと行動を共にしており、そのグループはまた総数23羽の群の一部であるように見受けました。（初期のころ）

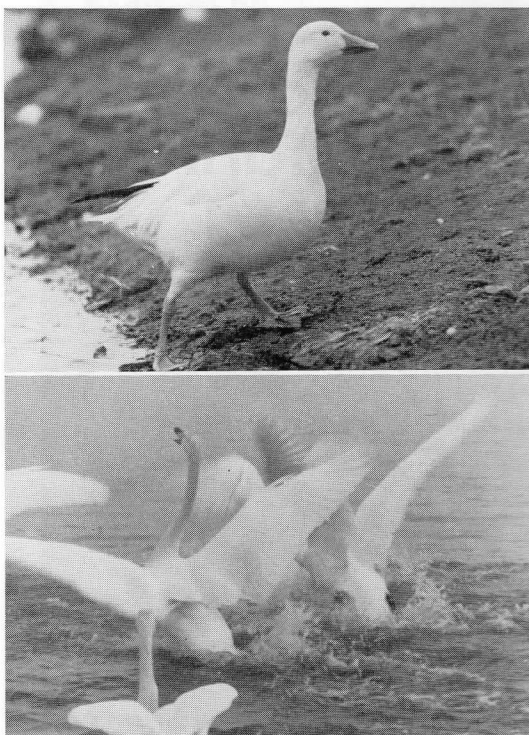
2 人を恐れることはなく、オオハクチョウがそばにいるせいもあるのですが、1m以内まで近寄ることもありました。また早朝などは岸辺に上って、こぼれているエンバクやパン屑をひろう姿にも接しました。

3 鳴き声はかなりの低音でグウーッ、グウーッときこ



え、なにか不平をもらしているようで愛きょうがありました。

4 3～5羽のオオハクチョウがかたまってもディスプレイするときには、わざわざそばへ行って共に翼をばたつかせることもありました。



5 給餌場付近の浅瀬で、オオハクチョウは腹がつかえない程度の水深なら泳ぐのが常ですが、ハクガンは足がとどく限りなら餌などは歩いて行ってとるのが普通のようなでした。

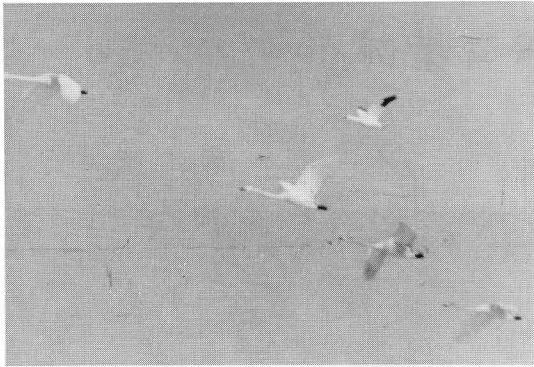
6 オオハクチョウどうしはよくケンカをしますが、どのオオハクチョウもこのハクガンを異端者扱いするようすはありませんでした。

7 オオハクチョウに比べれば動きは活発ですが、カモ類には比ぶべきありません。

8 グループのオオハクチョウが先に来ているのか、勝手に飛んでくるのか、子供たちが岸辺に立つと単独で給餌場に飛来するのが合計8回観察されました。

9 仲間のグループのいるところ、そのグループはわかるらしく、夕方単独で給餌場を飛去したとき、その着水面に行ってみたら、それらしい群を見られました。

観察時間帯でハクガンを見かけたのは4月20日の夕方が最後でした。ほとんどの白鳥が原生花園入江、浦士別入口の湾状部等に集中中なので、ハクガンが行動を共にしていたオオハクチョウの群もその方へ移動したためと考えました。



4月22日午後、中1の藤田宏幸君と白鳥の数をカウントしながら湖畔を東行していたとき、12群の渡去白鳥を観察しました。オホーツク海上に出て間もなく梯団を構成した5群の白鳥のうち1群23羽の中にハクガンが1羽混じて飛去するのを確認しました。全くの偶然でした。

23羽という数が単なる偶然の一致でないとするなら、何百羽の群でも、グループがひとつのまとまりをもって

いるものと驚きもし、感心しました。藤田君と共に無事故郷に帰れるよう祈ったものでした。

なお、「私たちの自然」No.124によれば、同一個体と思われるハクガンについて次のように記されています。

年	期間	場所	備考
S45 ~S46	冬	新潟県 瓢湖	幼鳥で越冬
S46	3月	北海道 濤沸湖	オオハクチョウの群中に
〃	10月 月上旬	濤沸湖畔	ヒシクイの群中に、 約1週間
〃	12月 24日	青森県 大湊海岸	オオハクチョウの群 の中に
〃	12月 29日	新潟県 瓢湖	同日夕方から47年2 月20日現在
S47	3月 12日	濤沸湖	同日夕刻から4月22 日迄

コヨシキリ

小堀焯治

札幌近郊の宅地造成はすさまじい勢いで進められている。私の家(白石)の囲りも例外ではなく、ここ数年の間ですっかり緑が減ってしまった。

4~5年前まではヨシ・ヨモギ等が群生し、野鳥の数も多かった。オオヨシキリ、コヨシキリ、ノビタキ、オオジュリン、ホオアカ、モズ、ヒバリ。オオバン、ノゴマ等珍らしいものも見られたのだが、オオバン、オオヨシキリ、ノゴマは全く姿を消してしまった。それでも、春になるとわずかに残された緑を求めて、ヒバリ、ノビタキ、ホオアカ、コヨシキリ等が住みつく。しかし個体数はめっきり少ない。地面に営巣する鳥は何んとかヒナを育てているようだが、安全な場所は少ない。ダンプがビュンビュン通る道端に巣を見つけてびっくりすることもある。一見、人間とうまく共存しているような印象も受けるが、彼等にとって命がけの毎日だろう。

とくに生活圏を狭げられたのは、ヨシ、ヨモギの中でしか営巣しない、ヨシキリではないだろうか。今年はコヨシキリの巣を3個見つけた。無事に巣立ったのは1個だけである。あとの2個は宅地造成のため、ふ化を間近にして、巣をかけていたヨモギがバッサリ切られてしまった。それにつけても考えさせられるのは、何故こんな

な危険な場所に巣を作るのかということである。人間の常識ではどうも考えられない。もっと条件の良い場所がたくさんありそうなものだ。多分、鳥の融通の効かない習性によるものだろう。自分の育った場所を目ざしてどんなに環境が変わっても帰ってくるのだろう。わずかに残った緑にしがみついて住んでいる姿を見るといたいたしい感じさえ受けるのである。

こんな状態が続けばいずれ里の鳥は追われて行くだろう。融通の効かない鳥たちを助けてやれるのはやはり人間でしかない。自然のバランスを平気で破壊する尊大さはいつまでも許されないだろう。一部の人間がやっきになって自然保護をさげんでも限界はある。一人一人が本当に自然を大切にすゝる気持を一日も早く育てていかなければならない。



トラフズクの一営巣例

入 江 義 智

昨年の営巣に引き続き、今年も千歳市郊外でトラフズクが営巣した。

営巣地は国鉄千歳線長都駅より西の方角約200mの国有林で、主としてカラマツで構成されている林である。巣は地上7.5mのカラマツの枝上に作られ、巢材の古さ及び巢全体から受ける感じからして、カラスの古巣と思われる。

トラフズクはちょうどカラスくらいの大きさで、小林桂助著の原色日本鳥類図鑑(1965)の図に比べて、はるかにほっそりしている。全体茶褐色の地に黒褐色の縦斑がある。目はオレンジ色よりもやや赤味が強く、頭頂に長い耳羽が生えているのが特徴である。

最初に営巣を発見したのは本会々員湯本信幸氏で、野鳥観察のため林の中を歩いている途中で発見したものである。私はその連絡を受けてから巣立つまでのおよそ30日間、観察を続けた。以下に観察ノートから転載してみよう。

5月10日、巣を発見し卵6個確認(湯本信幸氏)。

5月10日、親鳥が抱卵しているのを観察(湯本氏)。

5月14日、ヒナがかえっていた。ヒナは4羽で生毛は真白である。巣のはしに死んだネズミが1匹見える。

5月19日曇、ヒナはだいぶん成長しているが2羽に減っている。死んだネズミが6匹見える。

5月21日晴、トラフズクの親がヒナを抱いている。

5月28日晴、2羽のヒナはかなり大きくなった。死んだネズミが3匹見える。親は1羽しか認められない。ヒナ



の目は開いていて黄色であった。近づくとフウフウと声をあげながら翼をふくらませ、口をあげてパチパチと嘴で音をたてておこる。2羽のヒナのうち1羽は非常におこるが、もう一方のヒナは他方のヒナの背後に隠れて静かにしている。

6月1日晴、ヒナは一段と大きくなった。羽毛の色はやや茶色がかってきて、耳羽も目立つようになった。

6月3日晴、親鳥は巣にははいておらず、数十メートルはなれたカラマツの枝にとまっていた。

6月4日晴、藤巻裕蔵先生らと共に観察。一つのペリットとムクドリ(ムクドリ)の翼の骨らしい骨を巣の下の地表より採集した。

6月10日曇り、ヒナは巣にいない。巣の付近一帯を探したが、どこにもおらず巣立ったもようである。ペリットを一つ採集した。

地上からの巣の高さ、及び巣の直径を実測した。高さ—7.5m。外径—50×55cm、内径—27×30cm。

トラフズクの卵は初め6個であったが、そのうち4羽しかかえらず、さらに19日には2羽に減っていた。14日の前後3日間、雨が降り続き気温は低かった。また、観察をはじめ以来親鳥は1羽しか確認されていない。親の一方が近くで営巣中のカラスに殺されたものか、あるいは他の原因により死亡したのかはわからない。いずれにしても悪天候が続いたことと、親鳥が1羽減ったことが、ヒナの数が減った大きな原因であるように思われる。(千歳市千歳中学校3年)



シロチドリの繁殖を観察して

萩 千 賀

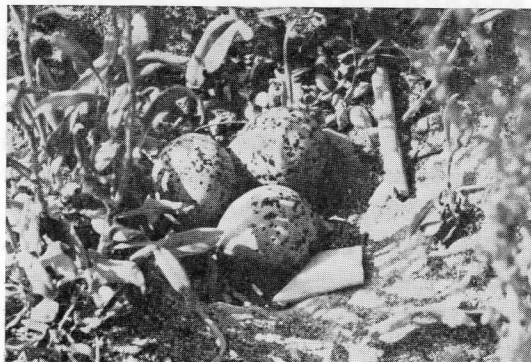


47年6月26日、干潟の鳥類の調査に来道中の保護連盟の柳沢さんと石狩河口の調査に入った。同行者は石狩支庁の竹内技師と私。このとき河口の渡船場を渡って約1時間(車なら15分)ハマナスの咲き乱れる砂丘と砂礫地帯に小さなスカンボやアカザが生えている場所のところに巣と3つの卵を柳沢さんがみつけた。ウズラの卵のような大きさであった。どうもシロチドリらしいと? その日親鳥は巣にはもどってこなかった。

27日 やはりシロチドリの雌が抱卵中であつた。この日は風が強く、風のため時折目をとじたり、時々むきを変えて抱卵する。車を遠まわりして抱卵中のところまで7~8mの距離で窓をあけ写真をとる。一人出てみると忽ち擬傷を始め我々を遠くに誘導するかのようになり、その中車から出て、すばやく卵の寸法をメモする。①は長径33mm短径25mm ②は長径32.5mm短径24mm ③は長径31mm短径24.5mm卵の写真をつとりあわてて車の中に入り様子を伺う。親が巣にもどるまでさほど時間はかからなかった。

7月9日 羽田さんと観察に行く。いまだ抱卵中。卵をみつめてから14日目。盛んに擬傷する。

7月19日 羽田・溝部さんと観察する。今日で卵をみてから24日目。今日こそはヒナをみれるかとひそかな期待を抱いて休暇をとってやってきたが、相変わらず抱卵中、3人の姿を一早くさとして親鳥は逃げ出し、あわれ



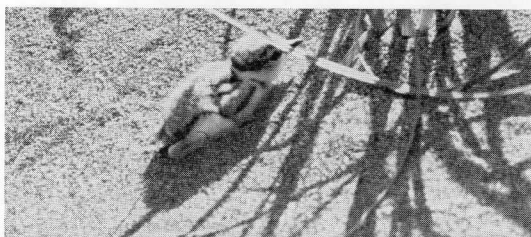
な声をあげてわめきたてすごい擬傷をはじめ。いまだかつてみたことのない擬傷である。明日はきっとヒナ誕生であろう。そんな感じがした。

7月21日 11時頃羽田・溝部さんから電話が入った。いつもの場に親鳥はおらず、その場には卵の殻もなく、さがしたら沼の小さなヨシの茂みの中に2羽のヒナをみつけたという。嬉しい報告だった。

7月25日 ヒナは歩いて何処にいってしまったろうかでも限られた場所だから心配はないと思って出かけたが立入禁止の札が立っている砂採場と化してしまい人夫が働いている。こちらの方が札をかかげたいと思った。沼のふちを歩き出そうとしたら羽田さんがいるというその方を見ると沼から1羽が今上ってきたところであつた。あつという間に小さな草の下にふせてしまった。ふせてしまったらさがすのは一苦勞する。もう1羽は前に2人がみつけたあたりにふせていた。先にみたヒナより少し小さい。發育不良と話してるともしかしたら通じたのかも知れない、急に走り出した。足長で実に早いほんとうに可れんである。ヒナの全長5cmくらいか

8月5日 3人でやってきた。今日で誕生してから16日目少し大きくなった。この日はプロミナで眺めるとコチドリ夫妻とヒナ2羽、シロチドリ夫妻とヒナ2羽、御対面というところ、実に楽しかった。

8月17日 シロチドリのヒナ誕生から28日目遠くからプロミナで眺めると2羽のヒナは無事、母親につきそわれて健在であつた。ヒナは羽を時折のばしたり、羽づくろいをして、間もなく飛翔出来る日を待っているであろう。それまで母親は暖かい目で我が子の一人前になるのをみまもっているのであろう。私たちがこの日をもってシロチドリのヒナの観察に終止符をうつことにした。



写真説明 1 抱卵中のシロチドリのメス 2.シロチドリの卵 3.4.シロチドリのヒナ(大きさが異なる)

鳥のこえ人のこころ

勝 玄 夫

探鳥会とき、うろ覚えを話した万葉の鳥のことを資料用にまとめてみます。スペースを考えノートふう

☆中西悟堂さんが低山性・鳴きながら飛ぶなど14の特徴からカホドリはカッコウと推定されていますが（万葉集大成8）、山田孝雄さんにはカホーカホーときいて容鳥（かほどり）をあてたという説があります。これが7首あります。

アコ→吾子ウ→呼子鳥→カッコウはだいたい定説のようですが、古くは伴信友の呼子鳥ホトトギス説あり、中西さんも巻八1419神奈備…の鳴きかたはホトトギスがふさわしいといっていますが、一応、集中の呼子鳥9首。くらべてホトトギス 156首と圧倒的です。なぜか。それは後まわしにして、その前に渡りの問題――

万葉時代の渡り

☆ホトトギス 156首の約4割、56首が越中守時代の大家家持。相当な傾倒ぶり、巻十七3893注（立夏から数日経ったがホトトギスがまだ鳴かないので）、巻十八4068（明日は立夏、今宵は飲み明かして曉にホトトギスの初音をきこころ）など、どうしてそんなにという気がする位。巻十七3984注にも（ホトトギスは立夏に來り鳴く必定）とある。その立夏は今の暦で5月5日ごろです。

☆大後美保さんの動物季節の本では、ホトトギスが渡ってくるのはカッコウより5日おくれ、北九州、四国を通過して房総あたりまで5月20日の線でごく区切れ、家持のいた富山あたりは5月31日の線でごくまわっています。

中国文学の青木正児さんによると、唐の顔師古の校注文に（子規、常に立夏をもって鳴く）とあり、別に（子規シヨク中に出づ）と出ているそうです。（中華名物考、以下、この文の中国のことはこの本からの孫引き）。シヨクは四川省の古名ですから、以上のデータをならべると、万葉時代には中国の成都・重慶あたりと、3千キロはなれた富山あたりでだいたい同じ日にホトトギスの初音をきいたわけ。現代の渡りより早いこと約一月。

☆キキキキと鳴くときいて規をあて、呼びやすいように子を加えて子規。鳴くとき大きく開ける口の中が真赤→鳴いて血をはく→カッ血→肺結核の正岡子規のペンネーム→明治の小説不如婦。これもオノマトペで不如婦となくと中国文献にあり。カッコウの方は鳴く声の子音をKときいて郭公（Ku-Kung）、穫穀など。Pときい

て布穀、保姑など。オニのカク乱のカク、公鳥と続けたのは中国文献に見当たらない、と青木さんはいいます。

ウグイス・卯の花

☆東北大学教授として12年も仙台のカッコウに親しんだ青木さんは、万葉のホトトギスはカッコウ、呼子鳥がホトトギス説を出していますが、おそらく第一の難点は巻九1755虫麻呂の長歌でしょう。図鑑等に托鳥卯の筆頭に出ているウグイスのこと。関東以南に分布のハナタチバナのこと。道南の一部が北限というウツギのこと。

福岡に生れ京に住んだ貝原益軒の大和本草に（布穀、郭公は一なり。この鳥、日本にいないのではないかとあること。現代では、神戸生れ、少年時代から六甲などの山を歩いた蝶マニアが札幌で生れてはじめてナマのカッコウをきいたという話。仙台・東京・横浜・秩父に住んだが、仙台以外カッコウのナマは全然きかず、ホトトギスは秩父で姿も見、うるさいほどきいたという話。

以上を生物ごよみの線と結びつけて考えます。

風土とのかかわり

☆平面的な地図を区切る線などでなく、立体性をもったもの、山での記録なども標高を入れてつないだ想像のオビです。高くあるいは低く、日本列島の上を波うちますが、カッコウの帯は、おそらく西南暖地で高く細く、東北・北海道で低く太いのではないのでしょうか。ホトトギスの方は西日本で低く太く、東北進につれて細まり、津軽海峡あたりで消えてしまうのでしょうか。

植物方言集でもカッコウバナ、カッコウグサは東北6県だけ。音楽的な、というカッコウの学名も緯度の高い国の産物です。カッコウの歌が万葉集でホトトギスの一割にもみたくないのは、その北方性にあるのでしょうか。

☆風土と文学のかかわり合いの問題で、巻十九4292心悲しものヒバリ、同4290うら悲しのウグイスは、春雨、春がすみ、春愁など湿度の高い長い春が背景で、長い長い梅雨を頭に入れないと真の鑑賞はできないでしょう。爆発的な北海道の春、さわやかな空をバックにきく鳥の声とは異質のものときえいえないのでしょうか。

自然に対応する日本人のメンタリティ古今不変といいますが、もし心の地図というのがあるとすると、ブラキストン線のようなものが引けるのではないかと、そんな気がするのです。（札幌在住）

特 集 鳥 の 記 録

今号はたくさんの方の報告が集まったので1頁を割いて特集しました。第7号の昨年の記録と比較すると、カッコウの渡来のおくれなどが裏付けられそうです。

◆ 珍 鳥

◇石狩川口にカラシラサギ 萩 千 賀
昭和47年6月27日、石狩川口でカラシラサギ1羽を観察した。観察者は柳沢紀夫さん、羽田恭子さん、萩の3名である。

シロチドリを観察した4人は何時もの干潟にもどり牧柵の中に入って川の方のカモメ、ウミネコを眺めていると、1羽の白い鳥が海上の方から上ってきた。下りた地点に車を廻してもらった。川の中にウミネコ、カモメの中にいる一際白いものを見つけ、プロミナでのぞくと、まさしくサギであった。このあたりはアオサギがよくみられるが白いサギは始めてである。プロミナをのぞいていた柳沢さんは、嘴が黄色い。こりゃ大変、図鑑、図鑑と車の中の図鑑を羽田さんがとりに走った。その間もしかしたらカラシラサギかも知れないと急に柳沢さんの目の

色が変わった。図鑑をしらべるとやはりカラシラサギだった。ウミネコ、カモメが一斉に飛立つとき、カラシラサギもとんだが、またすぐにもどってきてほっとした。柳沢さんも始めてであると、すっかり感激しておられる。吹きとばされそうになるプロミナをがっちり押えて、かわるがわるプロミナをのぞきこむ、嘴は黄色、風に胸と背の飾羽がなびきともさわやかにみえる。更にプロミナを近づけると眼光の裸出部の青色の部分までよく観察できた。

本種は中国・朝鮮・台湾などで繁殖し、冬期はマレー諸島、印度シナ半島などに渡るもので、日本では1956年に大阪湾からはじめて記録され、以後大阪湾と対馬で計4回採集または観察されているが、北海道からは今回が最初である。

◇ロシアカツバメ 6月30日 石狩町生振 松岡 茂
なお8月6日付北海道新聞によると、本種が稚内市稚内西小中学校で営巣中とのこと。観察者は同校の対馬勉校長。営巣記録は北海道で最初ですが繁殖に成功したかどうかは不明。

◇ハジロクロハラアジサシ 5月29日 小清水町で4羽 小川 巖 北海道での記録は46年5月23日(本紙7号参照)につづいて2回目。

◆ 夏鳥の初認

- ◇キジバト (一部前号既報)
- 4. 14 札幌市真駒内 新妻 博
- ◇カッコウ
- 5. 19 札幌市桜山 志尾大一
- 5. 22 江別市野幌森林公園 村野紀雄
- 5. 25 札幌市羊カ丘 小川 巖
- 5. 27 札幌市真駒内 志尾大一
- 5. 28 札幌市宮ノ森 新宮康生
- 5. 29 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- 5. 30 石狩町花畔防風林 松岡 茂
- 6. 1 江別市西野幌 百武千恵子
- 6. 2 札幌市白石北郷 新宮康生
- ◇ツツドリ
- 5. 5 札幌市界川 平井さち子
- 5. 6 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- 5. 14 札幌市真駒内 新妻 博
- 5. 14 千才市 小山政弘
- 5. 17 札幌市羊カ丘四十万谷吉郎
- ◇ジュウイチ
- 5. 17 札幌市界川 平井さち子
- ◇アオバズク
- 5. 6 札幌市界川 平井さち子
- ◇アリスイ
- 4. 22 石狩町花畔 松岡 茂
- 4. 25 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- ◇ヨタカ
- 5. 19 札幌市羊カ丘 小川 巖
及び四十万谷吉郎
- ◇ヒバリ (一部前号既報)
- 3. 21 札幌市羊カ丘四十万谷吉郎
- ◇ハクセキレイ (一部前号既報)
- 3. 23 札幌市真駒内 新妻 博
- 4. 23 札幌市羊カ丘四十万谷吉郎
- ◇モズ (一部既報)
- 4. 14 札幌市羊カ丘四十万谷吉郎

- 4. 21 札幌市真駒内 新妻 博
- ◇コルリ
- 5. 5 札幌市真駒内 新妻 博
- ◇ルリビタキ
- 4. 26 石狩町花畔 松岡 茂
- ◇ノビタキ
- 4. 26 札幌市羊カ丘四十万谷吉郎
- 4. 26 札幌市白石北郷 新宮康生
- ◇トラツグミ
- 4. 22 札幌市羊カ丘四十万谷吉郎
- 5. 6 札幌市真駒内 新妻 博
- ◇クロツグミ
- 4. 22 札幌市羊カ丘四十万谷吉郎
- 4. 22 石狩町花畔 松岡 茂
- 4. 23 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- 4. 25 札幌市界川 平井さち子
- 4. 29 札幌市真駒内 新妻 博
- ◇アカハラ
- 4. 25 石狩町花畔 松岡 茂
- 4. 30 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- 5. 4 札幌市真駒内 新妻 博
- 5. 5 札幌市羊カ丘四十万谷吉郎
- ◇ヤブサメ
- 5. 5 札幌市真駒内 新妻 博
- ◇ウグイス
- 4. 17 千才市 小山政弘
- 4. 24 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- 4. 26 石狩町花畔 松岡 茂
- 5. 5 札幌市白石北郷 新宮康生
- 5. 5 札幌市真駒内 新妻 博
- ◇エゾセンニユウ
- 5. 25 石狩町花畔 松岡 茂
- 5. 30 江別市大麻 百武 充
- 6. 3 札幌市羊カ丘四十万谷吉郎
- ◇コヨシキリ
- 5. 25 札幌市白石北郷 新宮康生
- ◇オオヨシキリ
- 5. 6 札幌市白石北郷 新宮康生
- 6. 14 札幌市北大農場 小川 巖
- ◇メボソ
- 5. 31 札幌市羊カ丘 小川 巖
- ◇センダイムシクイ
- 5. 8 美唄市 藤巻裕蔵
- ◇キビタキ
- 4. 25 札幌市堺川 平井さち子
- ◇ホオジロ (一部前号既報)
- 4. 4 札幌市羊カ丘四十万谷吉郎
- ◇アオジ
- 4. 17 石狩町茨戸 松岡 茂
- 4. 25 札幌市白石北郷 新宮康生
- 4. 26 札幌市羊カ丘四十万谷吉郎
- 4. 29 札幌市真駒内 新妻 博
- 4. 29 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- ◇オオジュリン
- 4. 14 札幌市白石北畔 新宮康生
- ◇ベニマシコ
- 4. 26 石狩町花畔 松岡 茂
- ◇イカル
- 5. 1 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- ◇コムクドリ
- 4. 29 札幌市真駒内 新妻 博
- ◇イソシギ
- 4. 15 美唄市 藤巻裕蔵
- 4. 26 千才市 小山政弘
- 4. 28 札幌市白石北郷 新宮康生
- ◇オオジシギ
- 4. 15 札幌市羊カ丘四十万谷吉郎
- 4. 20 美唄市光珠内 藤巻裕蔵
- 4. 26 石狩町花畔 松岡 茂
- 5. 6 札幌市白石北郷 新宮康生
- ◆冬鳥の終認
- ◇ツグミ
- 5. 8 札幌市真駒内 新妻 博
- 6. 12 石狩町花畔 松岡 茂
- ◇キレンジャク
- 5. 8 札幌市真駒内 新妻 博

十勝岳探鳥会に初めて参加して

厚真町 梅 木 允 子

真夏の日ざしが肌をつき刺す7月22・23日の十勝岳探鳥会は私にとって初めての探鳥会でした。

22日夕刻、凌雲閣でマイクロバスを降りる。活火山らしいイオウの臭いが鼻をつき、山と山のあい間に噴煙がたちこめている。さっそくイワツバメの飛びかう姿が目につく。他の愛鳥家達は、「アマツバメは尾が長い…」などとさかんに話し合っている。私は他のツバメは気をつけて見たこともなかったので、チンプンカンプンでした。でも、イワツバメは酸ヶ湯温泉や岩木山岳温泉にも多数営巣していて、あるときは、ぼんやりしていた私の頭にポタリとお土産をくれたりしたので、どうにか記憶がありました。

23日は、ふだんならグーグー眠っている早朝3時半頃同室の人達の気配に目がさめ、旧噴火口の近くまで、さっそく野鳥を求めて散歩(探鳥?)の始まりです。

ハイマツ帯の山道を登ってまもなく、「ルリビタキの声がする。」「ミソサザイもいるね。」などと同行者の声。まもなくウグイスが私達の気配を感じてか、おとくののどを聞かせてくれる。ハイマツの頂に胸と腹が黄緑色のアオジを双眼鏡でのぞく。他の何種類かの野鳥を見ることができました。

もどると、昨日イワツバメを見た場所で、こんどはキセキレイの撮影会をしている。鳥の方でも心得ているらしく、枯木の上でポーズをとり、例の轉りで余裕をみせている。私も双眼鏡のピントを合せて姿を確かめる。

朝食後、望岳台を目ざして本格的な探鳥会が開始された。ミソサザイが小さな体でさかんに囀っている。しっとりと夜露にぬれた野草が樹々の間から差し込む陽を受けて、この日の天候の良いのをつけている。

キリン草が咲き、ヤマソテツが葉を四方に拡げ、中に孢子葉を直立させている。まもなく、「アオジがいるよ。」とおしえてくれるが、朝聞いたばかりなのにもう忘れてしまっている。ウグイスの声だけが耳に入ってくる。足を止めると、ツピンツピンとヒガラが口早に囀り仲間入りしてくる。私もここにいるんですよと知っているのかも知れない。樹々の間からのぞかれる雲と青空が美しい。この時、ミミコウモリとオオバタケシマランを教えてもらう。岩場を下ると、登りになり、少し呼吸が乱れてくる。「山歩きをしたのは、学生時代以来何年ぶりかしら。」という「年のせいだよ。」と後で言っている。まもなく単調な下りにさしかかったが、愛護会の人達は相変らず囀る野鳥の声を聞き分けているのがうらやましい。私は少し前に聞いた声でもすぐに忘れてしま

う。姿と声が一致しない。

急に立止り、あたりがざわめきだした。双眼鏡でさかんに上をのぞいている。見上げると地味な小鳥が目映る。サメビタキだと教えてもらうまでにはそんなに時間はかからなかった。愛鳥家達は三脚をセットしたり、ザックから特別のレンズを取り出し撮影している。その間サメビタキはじっとしていない。あっちこっちと飛びまわり、「人がいるぞ、気をつけろ。」と知っているのか又は「下界の者どもにはポーズをとるな。」と言っているのかも知れない。10分以上かかってやっと数枚を撮り次の目的地白銀荘へ向う。前を歩いている人が、「ホンガラスをようやく見ることができました。」と言っている。遅れて歩いていた私たちは気がつかなかった。そのうち頭上をとぶのをはじめて見ることができた。白銀荘で休憩し、まもなくガレ場にさしかかるとパッと視界が開け、日がさしてくる。しばらくメアカンキンバイやタルマエソウの高山植物に熱中し、この時ばかりは野鳥のことなど忘れたかのようでした。私も可憐な花に引きつけられながら登る。そうこうするうちに九条武子の碑にたどりつく。タルマエソウの群落が美しい。

望岳台で昼食の後、鳥合せのミーティングもはや忘れかけていた野鳥の名前が再び耳に入ってくる。快い風が吹きつけ、無事、探鳥会も終りに近づいて来た。静かな午後の一時でした。同行の愛護会の方々は、林道で、あるいはガレ場で、家の近くで、小鳥達の声が耳に入った時は、何もかも忘れ、自分自身をこの可憐なものの生命の中に融合させることができる。この瞬間がこの方々は一番幸せな時なのではないでしょうか。初めての探鳥会はとても楽しい探鳥会でした。



『北氷洋は生きている』

ウスペンスキー・安積鋭二 喜田説治訳

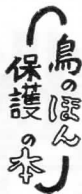
ハクガンのふるさと、ソ連の東北端にあるウランゲリ島にすむ動物たちの話である。ここは、まわりの海が氷から解放されるのが、7月末から9月までというほど北の国である。

毎年春になると、ツンドラ地帯にはハクガンの大群がやってきた。しかしこれは 200年も前のこと。その後 100年の間にその姿はほとんど見られなくなった。その原因はシベリヤにあるのではなく、もっと南の国々にあった。古くからの越冬地が開発されたり、大量に捕獲されたためである。現在ウランゲリ島が重要な繁殖地となっており、夏には50万羽も見られるという。ハクガンは保護されているが、産業的にも利用されている。卵がとられると、ハクガンは補充産卵をするので、うまく管理しながら卵を採集すれば、全体の鳥の数に影響しない。ハクガンの群生地 1カ所は、5000～1万のニワトリがいる養鶏場に相当するという。

この島には、シロクマ、トナカイ、セイウチなどの動物もいて、保護されている。その目的は、これらの動物を増やし、肉、脂肪、皮をつくる「生きた工場」にするためである。これは、北極に近い地域で、人間が直接利用しにくい資源を、動物を通して利用するすぐれた方法である。

野生動物の保護が、あくまでも人間のためのものであることを、いろいろの動物について述べている。

(パピルス刊、650円)



『野生鳥類の保護 一愛鳥読本一』

日本鳥類保護連盟編

この本は、鳥の保護についての総合的な解説書として編集されたものである。内容は、①野生鳥類保護の重要性にはじまり、以下②野鳥保護の歴史 ③野鳥保護の原理 ④関係する法令 ⑤生息環境 ⑥巣箱 ⑦水とえさ ⑧誘致植物 ⑨啓蒙と普及 ⑩今後の問題点とつづく10章で構成されている。そして、それぞれの専門家が分担して書いている。

たとえば、野鳥保護の重要性については、自然界のバランス、野鳥と害虫駆除、猛禽類の効用などの小項目にわかれ、たくさんの具体例をまじえながら保護の重要性が述べられている。

また、普及と啓蒙については、探鳥会や展示会をもよおす場合の実践的な要領や指導方法や、簡単な生息調査の方法などが記されている。

章によっては内容はかなり高度なものも含まれているが、全体として表現はわかりやすい。一般の会員はもちろんだが、とくに地方でこの方面に指導的な役割をはたしている人や、鳥類保護についてはっきりした理論づけを得たいと考えている人には、この上ない参考書である。

なお、この本は一般書店では販売されない。希望者は直接発行者 (〒150 東京都渋谷区南平台町8～20) あて申し込む必要がある。

日本鳥類保護連盟発行 定価 850円 送料 150円

行事報告

アーチボルド博士講演会

北海道自然保護協会と共催で、6月18日に札幌市農林会館で開きました。ジョージ・アーチボルド博士は米国コーネル大学出身の鳥学者で、国際ツル財団を主宰しています。今年2月に来日し、釧路湿原を中心としてタンチョウの調査を行っていたものです。この日は「世界のツル・日本のツル」と題し、カラースライドを用いて世界に住む15種類のツルの紹介と、北海道のタンチョウの分布と生態、湿原の破壊状況、今後とるべき保護対策などについて講演しました。

参加者 約60名

野幌森林公園探鳥会 5月14日

恒例のバードウィーク一般募集探鳥会。貸切バス2台

で森林公園大沢口から入りました。大沢から登満別園地まで行って昼食、それから中央線車道をおおって解散地点の駐車場まで。ふつうの夏鳥がひとつおり顔をそぞろえ人によってはトラツグミやアカショウビンを見てにぎやかな一日でした。

記録された鳥47種 参加者約80人

ウトナイ探鳥会 6月4日

暑い日でした。いつもとコースを変え、鉄道線路に沿って勇払川鉄橋の近くまで歩きました。湿原に出るとすぐコヨシキリやノビタキが姿をみせ、やがて待望のシマアオジがあらわれたときには、その美しさに思わず嘆声ももらす人もありました。ノゴマを眺めながら昼食をとり、同じ道を戻りましたが、帰りにはベニマシコも見られました。

記録された鳥 種 参加者約50人

クマゲラの記録を求めます

道内におけるクマゲラの生息域と繁殖状況を明らかにするため、アンケートにご協力下さい。

1. 最近10年間にクマゲラを観察した日時、場所をお知らせ下さい。場所は支庁、市町村、できれば観察した林の状況（例えば、針葉樹壮令林で構成樹種はトドマツ等）の順に記述して下さい。

2. さらに繁殖を確認された方は、左の記述の他に、その状況（営巣樹種、巣立ち日等）をできるだけ詳しくお知らせ下さい。

資料はまとめて「野鳥だより」に発表する予定です。

郵便宛先は、札幌市北9条西9丁目 北大農学部応用動物学教室内 松岡茂です。

野外観察ハンドブック 山野の鳥

— 事務局でとりつぎます —

日本野鳥の会では、野外観察ハンドブック・山野の鳥を今年5月に発行しました。山野の鳥 156種をカラーで図示し、見開きに簡単な解説をつけたものです。新書版62ページで持ちあるきやすく、値段も300円と安いものです。事務局ではこの本を会員の皆さまにお取次いたします。

ご希望の方は代金1冊分300円を添えて事務局までお申込みください。

なお、ひきつづき来年度水辺の鳥が発行されることになっています。

小樽 18287

— 振替口座ができました —

会費の納入などに不便なので郵便振替の口座を開いてほしい、という要望を、これまで多くの会員からいただいていたが、いろいろの事情でできずにいました。しかし今度事務の一部を国土緑化推進委員会に移したこと

にともない、口座を設けたのでおしらせします。番号は小樽18287です。どうぞご利用願います。なおご送金のときは、振替用紙の通信欄に送金の理由（〇年度分会費など）をはっきりお書きください。

私設・野幌探鳥散歩

野幌森林公園をブラブラ歩きながら鳥を見えています。おヒマな方はどうぞお出かけください。

◇日時 9月15日10月29日、11月12日、12月3日

◇集合 9、11、12月は午前9時国鉄大麻駅待合室、10月はコースを変えるので未定（同行のご連絡をくださる方におしらせします。）

◇天気が悪ければ中止します。

◇昼食、雨具などお持ちください。

◇歩く距離は10キロくらいあります。

◇都合により中止したり、日を変えることもあります。

お出になる方は必ず前日の午前中に下記までご連絡ください。

◇連絡先 道庁自然保護課 百武 充 (TEL 231-4111
—内線 3895)

<事務局だより>

☆ ずいぶん暑い夏でしたが、皆様いかがお過ごしでしたか。野鳥だより第11号をおとどけします。この夏は事務局が仕事に追われて多忙をきわめ、発行が1カ月もおくれてしまい、申しわけありません。

☆ 今年の北海道は本州からの観光客は昨年より少ないようですが、列車やバスの混みかたは相当なものです。7月の十勝岳温泉探鳥会もバスの予約ができず、これは旅館の厚意にすがってなんとか実行しましたが、9月に予定していた鵜川海岸への探鳥行も

札幌市内のバス会社に全部断られ、実現できなくなってしまいました。どうぞご了承ください。なお、事務局のメンバーなどで個人的に行く人はありますから、もし同行ご希望の方はお申出くださいれば日時などを連絡いたします。

☆ ハガキ1枚におさまる程度のもを除いて、原稿は必ず原稿用紙にお書きください。便箋やレポート用紙に書かれたものは、事務局で一度原稿用紙に写しかえなければならず、かなり手間がかかります。

☆ 12号の原稿は10月15日までにお寄せくださるようお願いいたします。